

木下順二評論集

1970～1972年・補遺

11

未来社刊

木下順二評論集 11 【全二巻】

一九八四年二月二二日 第一刷発行

定価二八〇〇円

◎著者／木下順二

発行者／西谷能雄

発行所／株式会社未来社

東京都文京区小石川三の七

振替東京七〇七三六五番

本文印刷／新協印刷

装本印刷／形成社

製本／今泉誠文社

凡例

一、本評論集全十一巻は、木下順二の評論、随想のほとんどすべてを可能な限り時間順に収録したものである。但し各巻の内容は、次の六項目に分類整理する。

I 主として演劇一般について

II 主として自作について

III 主として演劇外の問題について

IV (以上を『自』に即してのものとすれば) 主として『他』について

V 主としてシェイクスピアについて

VI その他(あるいは主として馬について)

なお、単行本として既刊の『ドラマの世界』(中央公論社、一九五九年、未來社、一九六七年)、『ドラマとの対話』(講談社、一九六八年)、『随想シェイクスピア』(筑摩書房、一九六九年)及び『シェイクスピアの世界』(山岩波書店、一九七三年)は、それぞれ一貫したテーマによる一冊本であるゆえに、本評論集に収録しない。『日本が日本であるためには』(文芸春秋新社、一九六五年)は、雑誌論文などを集めた評論集であるゆえに、分解して本評論集に収録する。

一、本評論集は全十一巻をもって構成され、それぞれの巻には、次にかかげる年度内に執筆されたものを収録している。

第1巻 一九三五年から五〇年まで

第2巻 一九五一年から五三年まで

- 第3卷 一九五四年から五五年まで
第4卷 一九五六年から五七年まで
第5卷 一九五八年から五九年まで
第6卷 一九六〇年から六一年まで
第7卷 一九六二年から六三年まで
第8卷 一九六四年から六五年まで
第9卷 一九六六年から六七年まで
第10卷 一九六八年から六九年まで
第11卷 一九七〇年から七二年まで及び補遺
- 一、本評論集は、現代仮名づかいで統一したが、収録文章が三五年間にわたっているため、漢字の用法その他で不統一な部分がある。しかし、当時の文体を尊重してそれらはそのままとした。
- 一、各篇末尾に、初出の誌紙名・年月日を判明する限り付した。

一九七二年一〇月

編集

菅井 幸雄
松本 昌次

* おことわり 紙数の都合上、予定を変更して全11巻で完結となります。ご諒承下さい。(編者)

木下順二評論集

11

目次

I

素人評	二
『白毛女』と一五年間	四
創作舞踊私見	六

II

中学時代	三
アンケートへの回答	三
忘却について	五
「審判」を書き終えて	五
文楽の『赤い陣羽織』	六
狂言の『二十二夜待ち』	六
ことばの勉強・序	三

III

予想どおりのコミュニケ	一〇三
謝花昇の目	一〇五

三	善	二〇
デコボコ先生		二三
原稿料について		二五
朝鮮民主主義人民共和国商品展覧会		二六
私と六月		二九
ロンドン讃歌		三三
日本社会の「水俣病」		三四
炬燵		三六

IV

文案の思い出		三三
指標としての「第三世界」		三三
名人譚		三八
内村鑑三『ヨブ記講演』		四〇
四月		四二
丸山先生のこと		四六
『古能』すいせん文		五〇
市河先生のこと		五二

阪谷^{芳直}正編『中江丑吉の人間像 兆民を継ぐもの』すいせん文……………一五

いろいろな国のいろいろなお話……………一五

ナセル大統領をいたむ……………一五

ひとこと……………一五

丸岡秀子『ひとすじの道』によせて……………一五

V

羊になるなかれ……………一五

シェイクスピア再考……………一五

VI

乗馬のすすめ……………一七

趣味ひとつ……………二〇

馬 学……………二〇

自慢のすすめ……………二〇

乗馬歴……………二四

馬と芝居と……………三六

補遺

I

見物の皆さんへ……………	二二七
『森は生きている』……………	二二九
茶の間劇……………	二四三
民話と現代……………	二四四
ハムレットと忠臣蔵……………	二四六
学校演劇の使命……………	二四九
注　　文……………	二五〇
国立牡丹峰劇場のこと……………	二五一
『山本安英舞台写真集』（写真篇、資料篇）の編集を終って……………	二五四

IV

鈴木元一君を惜しむ……………	二六三
ぼくの読みかた……………	二六四
大切な詩人……………	二六五
編集者の有機的な熱っぽい配慮……………	二六六

構造的編集の魅力……………	二六
自分なりの判断……………	二六
解きたい本質へ肉迫……………	二七〇
歌右衛門と新作……………	二七二
V	
シェイクスピア……………	二七九
VI	
ふるさとの春……………	二八五

I

素 人 評

劇評というと普通はむしろ専門家のそのことだが、もう一つ観客の批評というのがあるはずで、だから新劇でも商業演劇でもあるいは観客組織でも、そのパンフレットにいろいろ観客の声を反映させようとしている。例えば観客からのアンケートを（敢ていうなら儀礼的に）ずらりと並べて載せたりもしているが、例外はあるけれども多くの場合、それらの一つ一つはいわば素人の感想で、舞台をつくる側が、そこから学ぶということは、ほとんどないのではないかという気がする。

しかしそういう捨ててしまうことは、いう迄もなく誤りなのであって、それら観客大衆の意見のいわば総合が、舞台というものを成り立たせる重要な基盤であることは疑いない。ではどうしたらいいのか。数年まえ私はO労演にこう提案したことがある。専門家の批評と観客の意見をすべて視野におさめた上で、またO労演として一回一回この公演をなにゆえO労演が主催したかということを踏まえた上で、公演のあとのパンフレットに、O労演の責任においてO労

演の劇評を載せては如何。——〇労演は未だにその試みを続けているようだが、私自身も未だにそういう考えを捨てていない。

という、そういうことはある。そういうことはあるのだが、その一方で私がよく頭に浮べるのは、むかし歌舞伎の世界に存在した——というと、いや今も存在するといって怒る人が出てくるかも知れないが、そうだったらそれは頼もしい人だ——いわゆる見巧者のことである。彼らはまさに素人だった。しかし大抵の場合、実に確かな眼を持っていた。

むろん彼らには、よいお手本があったのだと思う。そのお手本というのはすなわち御社の先生がた、今日でいうなら専門劇評家たちだが、彼ら専門家たちプラス半専門家たちでつくられていたらしい例えば若葉会とか通話会とかいう、自分たちが実際に歌舞伎を演じるグループがあつてそれぞれ細かいところまでうるさかつたし、また別な意味でうるさい評判記の類があつた。今この原稿を私が書いている雑誌「歌舞伎」の前の雑誌「歌舞伎」を私は揃いで持っているがその創刊号は一九二五年五月。この目次ひとつ眺めても相当厳密でやかましい顔ぶれが並んでいるが、そのもう一つ前の雑誌「歌舞伎」、その創刊は遠く遡って一九〇〇年から終刊一九一五年まで、これをまたほとんど揃えて持っているが、そのページをばらばらめくっていると、例えば三木竹二と真如女史による、微に入り細にわたって縦横無尽、読んでいてもぞくぞくするような「歌舞伎座合評」などというものに、毎号お眼にかかる。いわば役者の手の上げおろし一つにまで、伝統的な型に関する豊富な知識を駆使しつつ、ということとは決して思いつきではない実にやかましい批評がそこには展開されている。

そういうお手本があったからでもあるのだろう、素人の組織するいわゆる「連中」または「組見（くみけん）」という鑑賞グループの中にも、「六二連」とか「水魚連」とか、うるさい集りがあったようだ。素人衆といっても、音曲や踊りを結構身につけた人々がその中には多かったはずで、だからしてそれらの代表的グループは、単に切符を引き受けてくれるというだけではなく、芸術上の監視者としてもまた十分に「圧力団体」であり得たようである。

今日の歌舞伎座なら歌舞伎座にそういう「圧力団体」は存在するのかどうか、私は不案内だが、もしもないのなら改めてそういうものをつくったらば、敢ていうなら養成したらばと思う。単に観客の思いつきのアンケートを集めるだけでなく、演劇の制作者はそっちのほうへも少しは予算を使ってみては、と思うのである。

〔歌舞伎〕一九七〇年一月

『白毛女』と一五年間

初めに一つのエピソードを書きとめておこう。

一九五五年、中国国慶節前夜の晩会に、私は松山樹子さんと同じテーブルに坐っていた。人民大会堂がまだできる前で、北京飯店の大宴会場、一卓三十人ぐらいのテーブルが、見渡す限り海のように無数に並んでいてもまた世界中の客人を収容し切れず、ほかに第二会場まであるということであった。

周恩来総理が、やがて乾杯に回ってこられた。テーブルについている一人々々に言葉をかけて、一卓ごとに乾杯をする。大変なエネルギーだと私は感心していたが、さてずっと先のほうのジャーナリストのテーブルで乾杯するとき、周総理がきょうは重大発表があるといわれたのだそうだ。なにしろ周総理の発言だからジャーナリストたちは色めきたった。ところがその重大発表の中身は、今晚この宴会場に、三人の白毛女がいるという冗談なのであった。歌劇の主役と映画の主役、この二人はむしろ中国の女優さんたちだが、三番目にバレエの主役松山樹